

シティプロモーションとは何だろう？

1. シティプロモーションとは、端的に言えば、まちをいきいきさせるための取組みだ。
2. まちの役所が「とにかくサービスをします。お年寄りではなく若い人、できれば子供のいる人、そうした皆さんに大サービスしますので来てください。これもやります。あれもやります」と一生懸命に叫ぶ。そのように取り組み、他の地域から人口をただひたすらに奪い取ろうとする。そうすることによって「持続」しようとする。シティプロモーションを、そのように考えているらしいまちの役所もある。それをお金やことばで後押しているような人もいる。しかし、それは徹底的に美しくない。
3. 美しくないまちに、人は共感を持つことはない。ほかよりいいサービスがこんなにありますと叫ぶだけで人口を奪い取ろうとするまちに、人は共感ではなく欲望によって居住する。まちの外にいる人たちは、そのまちに憧れを持たず、哀れみを持つ。
4. シティプロモーションとは欲望と哀れみを産み出す道具ではない。
5. シティプロモーションは、まちに住む人やまちに関わる人たちの、想いと働きを生み出す道具だ。
6. シティプロモーションという仕掛けによって想い・意欲を持った、まちに住む人たちや、まちに関わる人たちが動き出す。役所だけに頼らない、役所だけでは担いきれない、役所は担えない様々な人を幸せにする仕組みや、まちの困ったことを解決しようと動き出す。そのためにシティプロモーションがある。
7. まちに住む人やまちに関わる人たち一人ひとりの、まちをよくしようという想いを高め、想い・意欲に基づく働きを促す。その想い・意欲・働き全体の量（総量）を増やす。そのことが「担い手」を確保することにつながる。
8. 今まで、まちに住んではいても、まちをよくしようという想いや意欲を持たなかった人がいる。そうした人たちに、まちへの想いや意欲を高めることで、まちをよくするために働きたいと考えてもらう。
9. 今まで、そのまちのことを知らなかった、まちの外に住む人がいる。そうした人たちに、まちの魅力を伝え、「いいな」と思ってもらい、そのまちへの想い・意欲を高め、できる範囲で何かしたいと考えてもらう。
10. ただ、そのまちに住み、そのまちからサービスを受け、税金を「とられるもの」と思い、まちの選挙にも行かず、役所に文句をいい、隣近所に文句をいう頭数を増やすことが、まちの「担い手」を増やすということなのか。
11. 自分が関わるまちへの誇り・共感が、まちへの想いと働きを生み出す。
12. 自分が住むまちの魅力をひとつも挙げられない人の約 75%が、まちをより良くするために働くつもりはない。一方で、自分が住むまちの魅力を 5 つ以上挙げられるという人の約 75%が、まちをよりよくしたいと思っている。だから、シティプロモーションは、まちの魅力を様々に示していく。だから、シティプロモーションは、まちの魅力を語るものにする。
13. シティプロモーションは、まちに関わる人たちの、緩やかに続く幸せを実現するためにある。
14. シティプロモーションは、まちの魅力を様々につなぎ合わせ、ほかのまちとは異なる力を持つ「語りたくなる」存在として、私たちのまちを描き出す。私たちのまちは、様々な魅力に支えられ、短いことばで語るができる、ほかのまちとは異なる「空気」「雰囲気」があるまちだと語れるようにする。まちに住む人や、まちの NPO・会社による、まちでの多彩な活動を、その「空気」「雰囲気」にひもづける。「あなたたちの活動があるからこそ、まちの魅力が生まれ、まちの特別な『空気』『雰囲気』が生まれ、このまちを支えることにつながっている」と伝える。シティプロモーションは、そうやって、まちの人たちを元気づける。あなた方には意味があると伝える。
15. シティプロモーションは、サイズの異なる金太郎飴のようなまちをつくることではない。
16. シティプロモーションによって、まちに住む人たちやまちの NPO・会社が「自分たちのまちは、ほかとは違う特別な「空気」「雰囲気」のあるまちだ」と思えるようになる。
17. シティプロモーションによって、まちに関わる人たちは、自分をまちにとって意義のある存在だと思える。生きがいを持って、そのまちに関わることが可能になる。

独坐観念・一期一会

「主客とも餘情残心を催し、退出の挨拶終れば、客も、露地を出るに高声に咄さず、静にあと見かへり出行ば、亭主は猶更のこと、客の見へざるまでも見送る也。

扱(さて)、中潜り・猿戸、その外、戸障子など、早々立などいたすは、不興千万、一日の饗応も無になる事なれば、決て、客の帰路見えずとも、取かた付、急ぐべからず。

いかにも心静に茶席に立もどり、此時、にじり上りより這入、炉前に独座して、今暫く御咄(はなし)も有べきに、もはや何方まで可被参哉(まいらるべきや)、今日、一期一会済て、ふたたびかへらざる事を観念し、或は独服をもいたす事、是、一会極意の習なり。

此時、寂莫として、打語ふものとは、釜一口のみにして、外に物なし。誠に自得せざればいたりたき境界なり」

(引用：井伊直弼『茶の湯一会集』2010年、岩波書店)

これからが これまでを 決める

「これまでが これからを 決めるのではない。これからが これまでを 決めるのだ(藤代聡鷹)」。過去400年の歴史に安易に寄り掛からない。これからの400年を通して、「過去400年の値打ちを育てる」ために、いま何ができるか、何をすべきかを考える。

「ともに、ここで、無事に」につながる“ビジネス”モデル

「星の王子様」の作者サン＝テグジュペリは人間について、こんなふうに言っている。

人間であるということは、とりもなおさず責任を持つことだ。人間であるということは、自分には関係がないと思われよう。不幸な出来事に対して憔悴することだ。人間であるということは、自分の僚友が勝ち得た勝利を誇りとする事だ。人間であるということは、自分の石をそこに据えながら、世界の建設に加担していると信じていることだ。

ところが実際には、僕らときたら、責任からは逃れたい、自分には関係ないとシラをきり、たい僚友の勝利はしばしばねたましく、他人の「石」をせっせと奪い取りながら、世界の解体に加担しているといった始末だ。ラジオを聞いても新聞を読んでも、僕らは「しかもこの頃は世間に名のある人たちが面白いほどに、サン＝テグジュペリ彼が言う「人間」とまるで真逆なことをやっている。ひょっとしたら彼は、それを承知で、あえてさかさまに、かくあれか

しと願いを込めて、こう語ったのかも知れないなあ。

僕の周りで彼のいう人間を实践している人として、いちばんに思い浮かぶのは、あの、人通勤途中、道はたの小さなお地蔵さまに、いつもきれいな花を捧げておられるおばあさんだと思ふ。

じつはまだ顔を見たこともないけれど、この人は、人間のひとりなのだと思う。

いつ見ても手向けられているきれいな花。それを目にするだけで、追行く僕の心はほんのり温かくなる。良い日だな、いいまちだなと感じる。

当人にそんなつもりはなくても、欠かさず花を手向け続けるその人の日々のいとながみが、通りすがりの見知らぬ僕をも温めている。

その人は、自分の「花」を捧げることで、このまち「世界の、やすらかな朝の建設に加担している。

ラジオの向こう、新聞の上の「世界は今日も滑稽なほど悲惨だけれど、このまち「世界の路傍に今朝も花は絶えない。」

ソラミミ堂

【1】1月
サン＝テグジュペリ「星の王子様」
大塚訳、新潮文庫、1995年

朝の建設

邂逅するソラミミ堂 34




イラスト 上田三佳

(上田洋平『DADA-Journal』No.657連載「邂逅するソラミミ堂」第34回「朝の建設」、北風写真館、2018年)

「いやいや滋賀県民だからってそんなに毎日鮎しを食べるわけではないヨ」そんなのも納豆もほって何?という話である。

もちろんそれらも全く関係ないとは言えないが、実際にはいろいろな要因が複合的に作用しているのだらう。

せつかくだから他府県の人には鮎し効果を信じておいてもらうとして、この鮎末を僕が面白いと思うのは、結局のところその確立に向けてイベント・宣伝、あの手この手で頑張っているのをしり目に、「そこに暮らす人たちの誰もが健康やかで無事で居るということ」、それが一番の「地域のブランド価値」なのだ、これではつくりたからだ。

とびぬけた、稀少なモノやコト(だけ)ではなくて健康やかで長生きのおじいちゃんやおばあちゃん、健康やかで生き生きとした子供、若者、生きものがともに、無事に、そこにいること。

それが出発点にあつて、そこからさかのぼって見たときに、人びとやその暮らしの健康やかさをもたらしてくれる自然や生き物・風土・文化とそれらの互いのつながりといった様々な恵みがそこにあった。

そんなふうにしてたどり着くのが「地域ブランド」「地域の魅力」だと思ふ。

すなわちわれらが誇りに思ふ大事にすべきは、「ともに、無事に」につながる滋賀の「地域のビジネスモデル」だと思ふ。

ソラミミ堂

ともに、無事に

邂逅するソラミミ堂 35

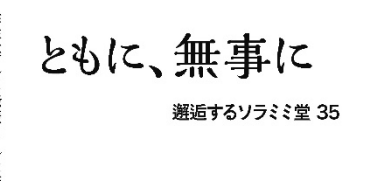


イラスト 上田三三

(上田洋平『DADA-Journal』No.659連載「邂逅するソラミミ堂」第34回「朝の建設」、北風写真館、2018年)

ダイアログを通じた戦略策定を

「ディベートは、話す前と後で考えが変わったほうが負け。ダイアログは、話す前と後で考えが変わっていなければ意味がない。」 平田オリザ

ディベート(討論)とダイアログ(対話)の違いを訊ねたとき、劇作家から即座に返ってきた答え。対話は、共通の足場をもたない者のあいだで試みられる。呼びかけと応えの楽しい交換であり、吐露と聴取の控えめな交換であり、埋まらない溝を知らされたあとの沈黙の交換である。討論よりもおそらくはるかに難しい。

(引用：鷲田清一「折々のことば」朝日新聞、2018年2月20日付朝刊)